

# ヒンドゥー教徒たちの魂の送りと 性的マイノリティーたちの文化運動

杉木 恒彦

## 1. はじめに

ネパールの首都カトマンドウの夏は、死者の世界と生者の世界を隔てる境界が薄れる。カトマンドウの先住民族であるネワール族のヒンドゥー教徒たちは、この時期にカトマンドウの旧市街においてガイジャトラ (Gai [Saparu] jatra 「牛の行列」) という大きな祭りを行う。1年以内に死者を出したネワール族の各家庭は規定の準備をした上で、この祭りの日に牝牛 (Vaitarani) あるいは牝牛に扮した年少の親族男子を先頭にカトマンドウの旧市街を行進する。この行進の目的は——これは参加者ほぼ全員が「語る」目的と考えてよい——死者の魂をヤマの門へと送り、良き来世に転生させることにある。

また、この祭りは、死者の魂の送りとは別に、世俗的権力者や社会規範のあり方を人々が公の場で皮肉し、笑いあい、盛り上がる場でもある。祭りの午前から昼間にかけては各家庭による送魂行進が行われるが、午後には特定の信念を持った学生の団体や仮装集団による社会批判・規範逸脱的パレードが行われる傾向がある。魂の送りと社会批判の実践の間には直接の連続性が見出されるケースもあるが、それが曖昧なケースもある。人々は魂の送りこそガイジャトラ祭の目的であるという語りを概してするとはいえ、たとえばメキシコのお盆ともいえる「死者の日」祭と同じように、魂の送りの実践と社会批判・規範逸脱の実践の共存あるいは二重構造はガイジャトラ祭の大きな特徴である。

現在、グローバル化の中で聖都カトマンドゥの社会は急激に変化しつつある。その変化はこのガイジャトラ祭にも影響を及ぼさずにはいられない。確かに、この祭の目的とその由来神話は維持されている。二重構造も維持されている。だが、死者の魂を送る家族たちの行列の姿・構成は変容しつつあり、その中には現代性を強く帯びたものもある。また、特にここ数年は性的マイノリティーたちのグループの行進が人々の注目を浴びている。彼らが行う行進は極めて現代的な性格を持つと同時に、ガイジャトラ祭の伝統的様相と様々な面で合致するものでもあり、彼ら自身もそのことを戦略としている。本稿では、ガイジャトラ祭を通して、輪廻文化における魂の送りの文化空間、およびその社会的実践は現在どこへ向かっているのかを検討する。

## 2. 分析の方法

本稿は2005年8月に発表者が行った現地調査<sup>1)</sup>に基づく。ガイジャトラ祭はカトマンドゥのみならずネワール族が居住する多くの町や村で行われ、それぞれが個性を持っており<sup>2)</sup>、特にバクタプルで行われるものは最大規模を誇るといってよい。今回、筆者がカトマンドゥの事例を選択したのは、筆者が「伝統的な」ヒンドゥー文化と現代文化のダイナミズムの現場の分析に関心があることによる。南アジアの代表的聖地の一つであると同時にネパールの首都であるカトマンドゥはネパールで最も急速に近代化が進行している都市である。この事例の選択は、ネパール宗教の研究者たちには保守的な形態を保つ祭りや儀礼を調査対象として好む傾向があり、現代的なものとの交渉を消極的に評価することに対する批判の試みでもある。

今回扱う魂の送り祭を含めた死者葬送儀礼およびその中に現れる規範逸脱的側面という、A. V. Genepの〈分離→過度→統合〉という移行論やV. W. Turnerのコムニタス論を思い浮かべる者もいるだろう。それらのモデルを完全に無視することはできないにしても、本稿はそれらのモデルに全面的に基づく通り一遍的な分析を避ける方針をとる。本稿では、B. MacCoy Owensのマルチフォーカルポリフォニー (multifocal polyphony) という手法<sup>3)</sup>に示唆を受けつつ、さらにそこにグローバルな文化とローカルな文化の

ダイナミズムという観点を導入することにより、ガイジャトラ祭における魂の送りの空間およびそこにおける人間関係の多様性・複雑性・闘争性・調和性を、現代カトマンドゥの社会文化的な文脈において臨場感を重視しながら描き出し、分析することを試みる。

### 3. ガイジャトラ祭にまつわる伝承

ガイジャトラ祭にまつわる神話あるいは伝承はいくつかあるが、この祭りの目的と構造の由来は大きく以下の2つの伝承により説明される。

1つ目は、輪廻転生思想とヤマ神（＝死の神：日本では閻魔として信仰されている）の門にまつわるものである。ゲンラー月（ほぼ西暦の8月に相当）の黒分第1日は、ネワール族のヒンドゥー教徒にとっては、1年で唯一ヤマ神の門が開く日である。この1年に死んだ者の魂はこの日にヤマ神の門に入り、ヤマ神の裁きを受け、いよいよ輪廻転生の準備に入るとされる。死者の魂は牝牛の尻尾にくっついてヤマ神の門へと旅立つのだが、これは、ヤマ神の門へ至る途中には様々な困難（火の川など）があり、牝牛は死者の魂をヤマ神の門に無事かつすみやかに導くと信じられているからである。ガイジャトラ祭がゲンラー月の黒分第1日に行われる魂の送りの祭りであること、そこでは牝牛が重要な役割を果たすことは、この伝承により説明される。

2つ目は、息子を失ったMalla王妃の悲しみとそのケアにまつわる言い伝えである（1769年以前のカトマンドゥ渓谷は、ネワール族のMalla王朝が統治していた）。息子を失ったあるMalla王妃は深い悲しみに苛まれる日々を送っていた。王は王妃に笑顔を取り戻すべく、カトマンドゥの住人たちに対し、年内に死者を出した家は牝牛を率いた隊（ガイジャトラ）をなして町を行進するよう命じた。これにより王は、死へと旅立ったのは自分の息子だけではないことを王妃に知らせめ、また皆で悲しみを分かち合うことにより、喪失の悲しみから王妃を救い挙げようとした。しかし、王妃は癒されなかった。そこで王は、ガイジャトラに参加した住人たちに対し、王妃を笑わせるよう宣告した。ガイジャトラの行列をなした住人たちは王宮にいる王妃の前に集まり、王妃に対し、悪い役人たちをネタにしたブラックジョークを連発した。

ジョークを聴いているうちに、王妃はついにたまらなくなって笑い出し、悲しみから立ち直ることができた。王は大変喜び、以降、ガイジャトラ祭ではジョークや皮肉で盛り上がるべしと定めた。魂の送りの実践と社会批判の実践の共存というガイジャトラ祭の二重構造は、この言い伝えにより正当化されている。

ガイジャトラ祭の目的・構造の由来を説明する上記2つの伝承は、カトマンドゥのネワール族ヒンドゥー教徒の間で語り継がれているのはもちろん、新聞やテレビや書籍など各種メディアでもしばしば紹介されるため、ネワール族以外のエスニック集団の間にも比較的によく知られている。

## 4. 各家庭の行進の変容

カトマンドゥのガイジャトラ祭に関するM. M. Anderson 1971の報告および現地の人々による説明を参考にしながら、著者による2005年の参与観察の結果を検討するという方法で、ガイジャトラ祭における各家庭の行進の変容を検討したい。なお、Andersonの観察した時期と著者の観察した時期の間には大きな変化がカトマンドゥ社会に生じている。1990年の民主化運動・憲法改正・経済自由化により、(i) 法的にはすでに撤廃されているとはいえなお名残を残すカースト論理（およびそれと相補的な世俗放棄者たちの論理）<sup>4)</sup>、(ii) ヒンドゥー・ナショナリズムとの共存が試みられる多民族・多文化社会の論理、(iii) 資本主義的クラス論理<sup>5)</sup> の3つがカトマンドゥ社会を複雑に構造化するようになっている。

### (1) 隊の構成

ガイジャトラ祭では行進に参加するすべての家族が組織的に一つの列をなして行進するのではなく、それぞれの家庭が互いに独立した個別の隊として行進する。Andersonによれば、隊の構成は、(a) 牝牛あるいは牝牛に扮した家族内の年少の男子と（→図1および2）、(b) ヨーガ行者の格好をした家族内の少年と、(c) その他の家族成員（ただし成人女性を除く。また、死者を出した家庭の成員のみならず、死者と付き合いのあった他家の友人たちが隊に参

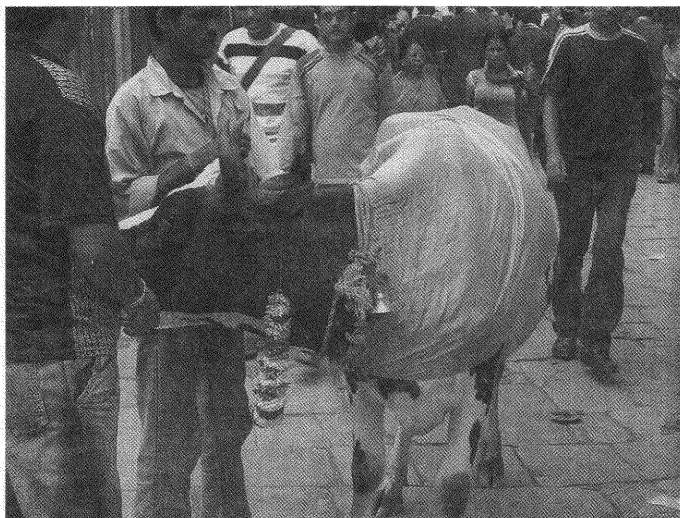


図1 牡牛：黄色の布が被されているが、これはこの祭りで世俗放棄の象徴であるヨーガ行者がまとう衣と同じ色の布であり、この牡牛の脱俗性を表すという。  
(2005年8月著者撮影)



図2 牡牛に扮した少年3人：2本の角のある帽子には牛の絵が描いてある。  
(2005年8月著者撮影)

加することもある)と、(d) 専門の男性家庭祭司と、(e) 専門の楽隊(楽隊カーストの者たちを雇う)である<sup>6)</sup>。その他、死者の遺影や形見が隊により運ばれることもある。

牝牛は魂を運ぶ聖牛である。本物の牝牛を持たない家庭は、その家庭の年少の男子が牝牛の格好をしてその役割を果たす。ヨーガ行者は世俗を放棄した修行者である。ヨーガ行者の格好で家を出ることは、家庭を捨て世俗を放棄することを意味すると現地では考えられている。ここで言うヨーガ行者は本物ではなく、その家庭の少年がヨーガ行者の格好をして世俗放棄を演出するのである。専門の男性家庭祭司とは、その家庭の祭儀を担当する妻帯のネワール族ヒンドゥー教祭司カースト(Rajopadhyaya)の男性たちである。彼らはインドでいうバラモンに相当し、在俗のネワール族ヒンドゥー教徒とヒンドゥーの神々の媒介者であり、世俗と世俗外、現世と来世の媒介者でもある。各家庭はこの祭りの執行のためにこのような家庭祭司に依頼をするのである。以上のように、現世と来世を橋渡しする聖牛と専門祭司、現世放棄の領域に身を置いたヨーガ行者が隊の基本要素とされていることから理解できるように、ガイジャトラ祭における魂の送りの空間は、世俗放棄の空間であると考えることができる。ネワール族の古都であるカトマンドゥ旧市街は、ヤマ神の門が開き死者の世界と生者の世界の間の境界が曖昧になるこの日、世俗放棄の空間と化すのである。

様々なネワール族カーストの家庭が組織的な順序なく一同に行進することから、ここにカースト序列(別の言い方をすれば、世俗序列)の曖昧化を見いだすことも可能である。これは、上述のようにこの空間が世俗放棄の空間であることと関連していると考えられる。だが、この祝祭空間の姿は世俗序列の「曖昧化」なのであって、決して「転覆」や「無化」ではないことに注意しなければならない。たとえば、女性たち(成人女性たち)は隊には参加しない。彼女たちは道端に待機し、道を通る各隊にミルクを捧げたり、お菓子やサラダを捧げたりする(→図3)。これは死者供養の一環であるとともに、その供養により女性たちは功德を得、その功德は自分が死んでヤマ神の裁きを受ける際に評価の対象となる。また、不可触カーストの家庭は自身の隊をなして行進しない。また、家庭祭司を務める上級祭司カーストの家庭も自身



図3 行進する牡牛役の少年に対し、道端に待機してミルクを捧げる女性  
(2005年8月著者撮影)



図4 女子が牡牛の役を務めていた隊：男子はヨーガ行者の役を務めていた。  
(2005年8月著者撮影)

の隊をなして行進しない。それらの間に位置づけられる様々な非専門的在家ヒンドゥー・カーストの各家庭が、それぞれ家庭祭司を招き入れて隊をなすのである。このように、この空間には祭儀のジェンダー・ロールをはじめとする祭儀的分業、上級祭司カーストの特権性が維持されている。

だが、2005年の行進では以上のような構成をとらない隊も多かった。年少の男子がいるにも拘わらず、ある家庭では年少の女子が牝牛の役割を担って行進に参加していた（→図4）。このことを質問すると、「牛は牝牛だから女子がやってもよいのだ」という答えが返ってきた。その他、装飾が施された軽トラックを牝牛としている家庭もあった。その家族成員は牝牛としての軽トラックの荷台に乗って旧市街をゆっくり行進（運転）していた。また、専門の家庭祭司をつけない隊も少なくなかった。ヨーガ行者（ヨーガ行者に扮した家庭の男子）をつけない隊も、専門の楽隊をつけない隊もよく見られた。また、隊の構成員の数が3～4人といったように少ないものも目立った。この祭りはネワール族の祭りではあるが、ネワール族以外のカトマンドゥ在住の者たちの行進参加も見られた。

## (2) 行進のルート

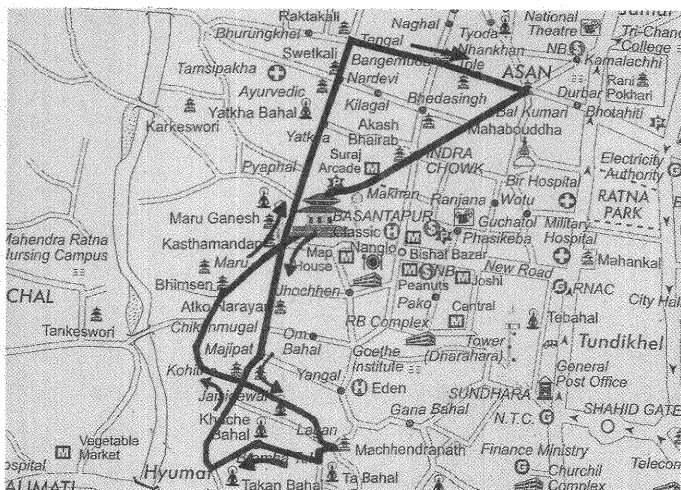


図5 ガイジャトラ行進ルート：旧市街のほぼ全体を時に交差しながら一周している（著者作成）



行進のルート（王宮前広場を交差する形でカトマンドゥ旧市街の主要路を進む）は専門祭司カーストにより元来規定されており（→図5）、それは2005年もほぼ維持されていると見てよいが、このルートを少し逸脱する隊も見られた。質問をすると、ある者たちは「ルートは定まっている」と答え、ある者たちは「王宮前広場を通ればルートは自由である」と答えた。さらに行進の出発地点だが、「出発地点は王宮前広場わきのマルトールと決まっている」「出発地点はそれぞれの隊の好みに合わせて自由である」といったように、専門祭司以外のカーストの者たちの解釈は様々ではない。

### (3) 死者へのプージャー（供養）儀礼の祭司

行進に参加する家庭はこの日、行進の前後に各家で肉親死者のためのプージャー（供養儀礼）を行う。その祭司は各家庭を担当する専門祭司が務める。しかし、2005年においては専門の家庭祭司ではなく、各家庭の年長者（しかも男性ではなく女性でもよい）が祭司を務める家庭も見られた。

以上の変容は、資本主義的クラス論理の台頭によるカースト論理の弱体化により説明可能である。カースト論理（およびそれと相補的な世俗放棄者たちの論理）が構造を与える祭儀社会においては、上級専門祭司が祭儀の執行と知識の管理において重要な役割を持ち、また祭儀におけるジェンダー・ロールも厳密である。だが、カースト論理の曖昧化により、この祭りに対する上級専門祭司の影響力と管理力、およびジェンダー・ロールの曖昧化が生じ、その結果、行進の解釈や表現も自由になってきている。カースト秩序では上級専門祭司の下に位置づけられていた上位から中位の在家ヒンドゥー・カーストの者たちは概して世俗化社会の中で新進気鋭のムードを見せるが、そもそもこの祭りで隊を構成する家庭はこのようなカーストの者たちであったことを忘れてはならない。また、隊の成員数が少ない家庭も目立ったことは、進む資本主義的近代都市化の中で核家族が徐々に増加していることを反映している。また、ネワール族以外の者たちの行列参加は、ネワール族の上級専門祭司の力の低下とともに、都市化の中でのエスニック集団の居住分布の複雑化を反映していると考えられる。

## 5. 性的マイノリティーたちの行進

ガイジャトラ祭の午後に行われる傾向がある社会批判・規範逸脱的パレードにおいてはきらびやかな女装をする参加者たちがやはり人々の目をひくようである。女装者たちが何らかの形で行進に参加することはすでにAndersonの報告の中にも見られる<sup>7)</sup>。だが2002年以降のガイジャトラ祭に登場する女装集団を含む性的マイノリティーたちの行進は、新たな構造を有するようになっている。

ネパールでは性的マイノリティーたちに対する行政保護は皆無であり、人々の受け入れ意識もかなり低い。彼らの中には社会から蔑視され、しばしば暴行を受けて生命の危険にさらされながら、安い男娼等として生計を立てざるをえない極めて貧しい社会的弱者たちも多い<sup>8)</sup>。2001年、Sunil Babu Pant氏は広義のゲイをはじめとするネパールの性的マイノリティーたちのためにBlue Diamond Societyを設立した。Pant氏によれば、「Blue」はロシアで「ゲイ」を意味する隠語であり、「Diamond」は伝統的ネパール仏教、すなわち「金剛乗」(金剛vajra、英語ではdiamond)をもじっている<sup>9)</sup>。だがこのBlue Diamond Societyはロシア嗜好のゲイ仏教徒集団であるというわけではない。それぞれのエスニックな背景を持つ性的マイノリティーたちのそれぞれの信仰や文化的慣習を尊重しつつ、「性的マイノリティー」であること、あるいは「クイア」であること——アイデンティティーを脱構築する「クイア」概念の元来の用法からすれば、それは逸脱した使用法、しかし生じ得る使用法ではある——を超宗教的・クロスエスニックなアイデンティティーの重要な源とする、ネパール初の全国ネットワークの世俗的な性的マイノリティー向上民間組織である。

Blue Diamond Society (以下、BDS) はガイジャトラ祭において毎年プライドパレードを行っている(→図6)。Pant氏によれば、それによって、この1年にHIV/AIDSで死んだ者たちや偏見等から虐待され殺害された性的マイノリティーたちの魂を送っているという。2005年ガイジャトラ祭では、派手な宮廷婦人風な装いをした男性たちが牝牛の役割を果たし、行進の最後に王宮前広場のGaddi Baithak付近でそのような死者たちの追悼のためにキャン



図6 BDSレズビアン・セクションの行進

(2005年8月著者撮影)

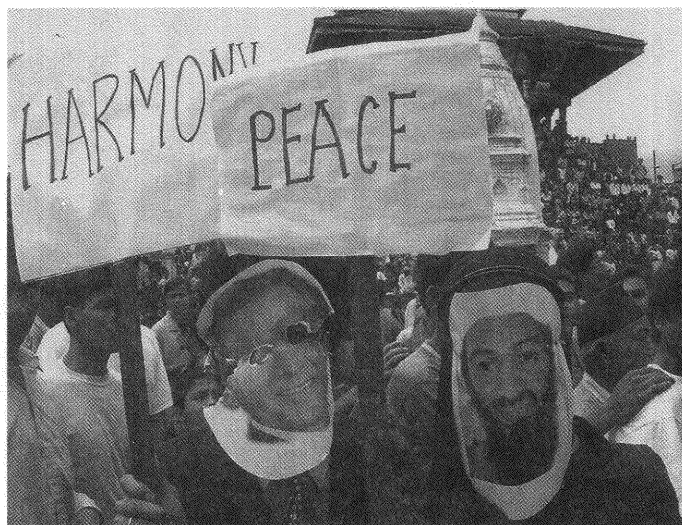


図7 Bush と Bin Ladenに扮したBDS成員：Bushが「Harmony」、Bin Ladenが「Peace」のプラカードを持って仲良く行進する。

(2005年8月著者撮影)

ドルライト・セレモニーを行った。性的な理由で死に至った人たちを追悼する西洋世界でのキャンドルライトメモリアルとも通じる面がある。

死者たちの魂の送り以外にも、Pant氏によれば、2005年のプライドパレードには「性的マイノリティーたちは国内外で起こっている紛争の痛みを分かち合っている」というメッセージがあるという。BDSの行進では、アメリカ大統領George Bushとアルカイダの指導者Osama Bin Ladenのマスクをかぶった成員たちが黒い衣服をまとって「Peace」と「Harmony」と英語で書かれたプラカードを持って歩いた（→図7）。その他、Surya Bahadur Thapa、Girija Prasad Koirala、Narayan Man Bijukshya、Jhala Nath Khanal、Madav Kumar Nepal、Sher Bahadur Deuba、Babu Ram Bhattaraiといったネパールの政治的指導者たち（最後の名前は、マオイストの指導者）に扮する成員たちも一緒に行進した。BushやBin Ladenのみならず、ネパールの政治的指導者に対するネパール国民たちの嫌悪感は決して低くない。だがこのパレードは、彼らを虚偽おろしたり否定したりするというよりも、BushとBin Ladenとネパールの政治的指導者たちそれぞれの存在を容認した上で、彼ら自身が「Peace」「Harmony」のプラカードを持って仲良く並んで行進するという平和的・調和的なものである。国内外の平和と調和という成員たちのトランスローカルな主張を、この国内外の政治的指導者たちをパロディー化したパレードに読み取ることができよう。

調和はBDSが強く主張する原理である。Pant氏によれば、性的マイノリティーたちの意識・社会的地位・生活の向上には、異なった個性の者たちの間の調和の精神が要求されるという。BDSのプライドパレードでは調和を表すレインボーの旗が毎年掲げられる（→図8）。2005年のガイジャトラ祭では、女装して行進した男性たちの衣装も、カトマンドゥ伝統スタイル、タライ伝統スタイル、西洋現代スタイル（あるいはカトマンドゥ現代スタイル）と様々であり、彼らが一团をなして行進をした（これは1990年以降の新憲法によるマルチエスニック国家宣言とも通じるものがある）（→図9）。Pant氏によれば、調和という原理を通して、「性的マイノリティーたちは国内外で起こっている紛争の痛みを分かち合っている」というメッセージが成立するのである。



図8 BDSの隊がかかげるレインボーの旗

(2005年8月著者撮影)

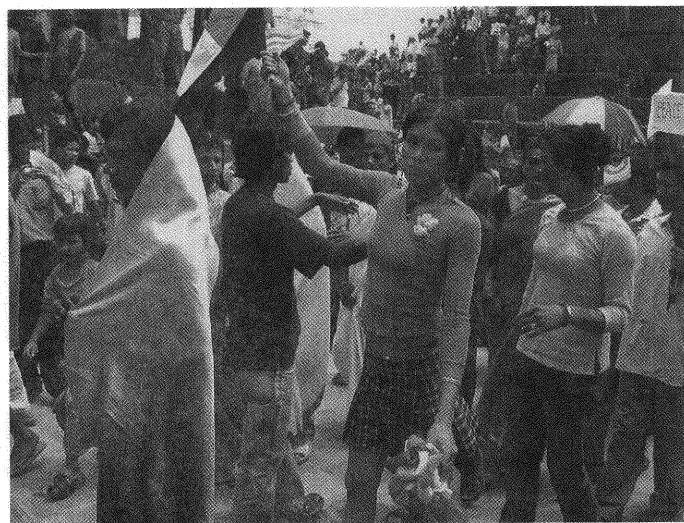


図9 手前向かって左からタイ伝統スタイルの者が1人、西洋現代スタイル（カトマンドゥ現代スタイル）の者が2人、その奥にカトマンドゥ伝統スタイルの者が1人いる。

(2005年8月著者撮影)

BDS幹部（彼らはミドルクラスである）はグローバルに広がりつつある「クイア文化」（このような「クイア」の実体視は彼らのスタンスの一つである）を意識している。彼らは性的マイノリティーたちを対象としたSTI／HIV／AIDS予防や検査のための各種サービスやそれに関する教育プログラムの実施以外にも、海外のクイア文化の情報も掲載する英語での刊行物の出版<sup>10)</sup>や、海外のクイア文化のフィルム（ドキュメンタリーやドラマ）の上映をBDS本部や支部で定期的に行っている。上述したように、パレードの演出もテーマもそこで使用される言語もネパール国内にとどまるものではなく、トランスローカルなものである。D. Altmanは第三世界のミドルクラスの同性愛者たちの中にはその国に「伝統的な」同性愛文化よりも西洋諸国の同性愛文化と共通する文化意識、あるいは同性愛文化にとどまらずグローバルな文化意識を持つ者が多いことを指摘するが<sup>11)</sup>、これはBDS幹部にも概ね当てはまる<sup>12)</sup>。

BDSによるガイジャトラ祭での行進は、この祭りの「伝統的」様式と合致する面も多い。この合致が、BDS成員の行進のプライドを一層高めていると言える。たとえば、死者の魂の送り、女装（伝統的に年少男子が牝牛の装飾をまとうことを思い起こしてもらいたい）などの日常規範逸脱性、派手さ、魂の送りのための行進ルートとの共有が一例として挙げられる。しかし、それらの諸要素は元来のコンテキストから脱し、グローバル時代の新たな想像力<sup>13)</sup>により再構造化されている。送られる魂は元来のコンテキストでは血縁的「家族」の成員であるが、BDSでは「クイア」アイデンティティーで結びついた（というより、現段階では結びつけようとしている）非血縁的仲間の魂である。女装も元来は——行進に参加できるのは男性のみであるという伝統的規定の上で——成人前男子のリミナリティーに基づく象徴的逆転であると考えられるが、BDSでは自分のセクシュアリティの主張である。派手さは、元来は自分の家庭の信仰の高さと社会的力の展示（あるいは誇示）としての豪勢さであるが、BDSでは社会の意識の変革を目指しての展示（あるいは誘い）としてのパフォーマンスである。行進ルートとの共有については、元来のコンテキストでは住人全体での死者の記憶とともにMalla王朝時代のネワール都市の記憶という要素もあると考えられるが、Malla王朝時代に根を持たず、

またネワール族のエスニック組織というわけでもなく、特にヒンドゥー教セクトなど特定の宗教的セクトというわけでもないBDSにとっては、自らのパフォーマンスを効果的にするための一種の模倣である。行進ルート沿いにいた女性たちの中には、各家庭の行進の場合と同様に、普段は社会から蔑視される者たちの組織であるBDSの行進に対して供物を捧げる者たちもいた<sup>14)</sup>。性的マイノリティーたちの行進は、グローバルなものとローカルなものが複雑に拮抗・浸透し合う場で脱/再コンテクスト化しながらカトマンドゥのガイジャトラ祭に溶け込んでいる。

## 6. 結語——魂の送りの文化空間の現在

死者の世界と生者の世界の境界が曖昧になるこの日に日常の秩序はぼやけ、普段は抑圧される性的マイノリティーたちも含めた様々な者たちの世俗序列が（完全な転覆ではなく）曖昧化した人間関係が実現する。元来このような人間関係に基づく場は、ガイジャトラ祭の場合は、カースト論理と相補的な世俗放棄の空間であった（だからこそ、日頃から世俗放棄に関与するカーストやそれに関連するジェンダー・ロールの特権性は維持される）。祭りの間、ネワール族ヒンドゥー教徒たちは町を挙げてこのような世俗放棄の空間に身を投じ、死者たちの魂を送る。皆で死の臨在の感覚を共有するこの諦観的な世俗放棄的空間は、その由来神話からも伺われるように、陽気さや笑いをともなうグリーフ・ケアの共同体空間でもある。

しかしカースト論理の衰退と新社会論理の導入により、この世俗放棄の空間には、上級専門祭司カーストの影響力和伝統的ジェンダー・ロールの曖昧化とともにグローバル時代の新たなアイデンティティーや政治性が入り込み、それらがこの祝祭空間における人間関係を、複雑に再構成するようになってきている。BDSの行進は、もはや単に死者とその土地に生きながらえた人々の間の事柄にとどまらず、グローバルな想像力に基づいた魂の送りの行進であり、現代的な政治性あるいは権利獲得の主張でもある。

〈注〉

- 1) 2005年8月18日～24日。カトマンドゥのガイジャトラ祭への参与観察、ならびに祭参加者および関連者へのインタビュー調査による。なお、本年度のガイジャトラ祭は西暦2005年8月20日に行われた。
- 2) たとえば、Anderson 1971, p.101-102, Levy 1984, p.442-452。
- 3) MacCoy Owens 2000, p.702-704。山車祭を分析したMacCoy Owensは、儀礼とは闘争のアリーナであり、ヘゲモンvs非ヘゲモンといった二項対立では把握することはできず、多様な語り手の多様なパースペクティブに着目することにより理解するべきであると述べる。それは儀礼実践の多様な意味と、儀礼参加者や神々の多様なアイデンティティーと、そこに見られる様々な特権性や権力の構成を明らかにするとともに、その闘争の中で形成される同意がその闘争をどのように再生産していくかについての理解を可能にするという。
- 4) 西暦1962年の憲法において、カースト制度は公的には廃止された。しかし、その名残は人々の慣習の中にいまだ残っている。特に本稿で扱うネワール族にはその傾向は“比較的”強いとみなしてよいだろう。

なお、カーストは外来語であり、ネパール語では「ジャート」という。「ジャート」は「生まれ」を意味する言葉であり（しばしば「職業」という意味でも用いられる）、「カースト」あるいは「エスニシティー」と訳される。前者には儀礼的身分制の意味合い、そうでなければ分業の意味合いが強いのに対し、後者には多民族主義的、多文化主義的な平等観がニュアンスとして強いものとしてネパールの人々には理解されているようである。
- 5) ここで述べる資本主義的クラスとは、Kathmandu現代社会をフィールドとしているM. Liechtyの言うハイクラス、ミドルクラス、ロークラスの3つのクラスを指す。M. Liechtyによれば、Kathmanduのミドルクラスの誕生とそのグローバルな文化意識の進展は、1950年以降の立憲君主制の開始と国際社会への積極的参加、そして1990年の第2期民主化と経済自由化により促進された（Liechty 2003, chap.2）。Kathmanduのミドルクラスとは、(i) ファッションであれ、メディアであれ、その他の商品であれ、グローバルに広がりつつある消費文化の諸要素の取り込みと、(ii) 「伝統的な」道徳——したがって現地ダルマの差別道徳的要素も残すことになる——の受け入れの共存とバラ



ンスを、周囲のネパール人に対する自らの威信や面目という観点から追及する文化的実践であるという。この実践が目指しているものは、国内のハイクラスとロークラスの者たちと差異化された自分、そして海外先進国の人々と同一化された自分というアイデンティティーの確立と維持である (Liechty 2003, p.85-86, 148, 204, 246など)。

6) Anderson 1971, p.99.

7) Anderson 1971, p.103.

8) このような事情は、D. Altmanによる以下の指摘と重なる面がある——「西洋のゲイ／レズビアン運動は、経済的に豊かで自由な民主主義の条件化で出現し、そのような地域では他の大きな社会的争点が存在していたにもかかわらず、セクシュアリティをめぐる政治を発展させることが可能であった。しかし、これは政治的生活の基本構造がつねに議論の対象になるような国では困難である」(アルトマン 2005, p.177)。ネパールは後者の型の国である。Kathmanduの性的マイノリティーの実態の詳細な説明は、今後の調査を待たねばならない。ここに述べた性的マイノリティーたちの情報は、後述のPant氏とのインタビューにより得たものである。なお、Kathmanduの娼婦(つまり女性の身売り)については、M. Liechtyが分析を試みている(特にLiechty 2001, p.66-74を見よ)。

9) Pant氏がロシア旅行を経験しており、また仏教を比較的高く評価していることがその背景にある。なお、仏教は心の静寂・平和・憐れみの精神を重視するというのがPant氏の仏教理解であり、これが仏教に対する彼の高評価の理由となっている。

組織名に特にBlue(「ゲイ」)の語が用いられているのは、Pant氏自身がゲイであることもあって、最初期においては広義のゲイを特に対象としていたからである。しかし間もなく、広義のレズビアン等も含めた幅広い性的マイノリティー全体を組織の射程に入れるようになった。

組織名に伝統仏教の用語であるDiamond(「金剛」)が用いられているが、Pant氏はこの語を、智慧を完成した者の精神と身体の完全性を表す言葉であると理解している。「金剛」(vajra)は、金剛乗仏教において、悟りあるいは悟りに基づく不壊性を意味する用語として使用されてきた。だがこの「金剛」(vajra)は、もともとは脱世俗化した意識により実現する解脱志向のものであるのに対し、Pant氏の使用法は伝統的な用語法の延長上にありつつも、

それを伝統仏教というコンテキストから外し、性的マイノリティーたちの個人の意識と社会的位置・生活の向上という世俗的なコンテキストの中に埋め込み直している。

- 10) だが、Pant氏によれば、たとえ性的マイノリティー関連の刊行物を作成しても、それを置いてくれる一般の書店はないという。性的マイノリティーたちに対するネパールの人々の意識の低さがここにも現れている。したがって、BDSと取引関係のある各組織や団体（特にSTI・HIV・AIDS予防・検査関連のもの）に、取引ついでに販売するというのが現状であるようだ。
- 11) アルトマン 2005、「たとえば、ニューデリーやジャカルタ、リマに住み、中産階級に属し、ゲイ、レズビアンを自認する者は、「伝統的な」同性愛よりも、西洋諸国の同じようなゲイ、レズビアンとより多くを共有している」(p.161)、「ゲイ・アイデンティティを受け入れている人たちは、フィリピンのゲイの作品集からの以下の引用（省略）に示唆されるように、グローバルな文化の一部分であることを望むことがよくある」(p.170)。
- 12) D. Altmanが「『近代的』な同性愛者のあり方は、『伝統的』な道德の擁護者だけでなく、ジェンダー不調和と異性装を中心とする『伝統的』な同性愛の形態も脅威にさらすことになる」(アルトマン 2005, p.161)と述べているように、グローバルな文化意識を持つミドルクラスの性的マイノリティーであるBDS幹部たちと、BDS成員の多くを占めるロークラスの性的マイノリティーたちとの間の関係についての分析も必要であろう。だがこの問題は、本稿の主題から離れて論が広がりすぎるという理由から、ここでは特に扱わないことにする。
- 13) ここで言う「想像力」は、A. Appaduraiに基づく。「イメージ、想像されたもの、想像界——どの用語にしたがおうとも、われわれの目線は、グローバルな文化のプロセスの新たな重要な要素、つまり《社会的実践としての想像力》へ向けられることになる。（大衆にとってのアヘンで、現実の労働とは場所を異にする）単なる夢想でも、（主として具体的な目的や構造によって規定された世界からの）単なる逃避でも、エリートの気晴らし（それゆえ、一般の人びとの生活とは無関係である）でも、（新たな形態の欲望や主体性と関係をもたない）単なる瞑想でもなく、他ならぬ想像力こそが、社会的実践を編成する領域、（賃金労働と文化的に編成された実践という両方の意味における）労働の形式、行為性（個人）の現場とグローバルに規定され

た可能性の領野とが交渉する形式となったのだ。……（中略）……想像力はいまや、あらゆる形態の行為性にとって中心的で、それ自体が一つの社会的事実であり、新たなグローバル秩序の重要な要素である。」（アッパデュライ 2004, p.66-67.）

- 14) Pant氏は、BDSに対するこのような供養行為を、社会の意識の向上の兆しであるとポジティブに述べている。

〈参考文献〉

- Anderson, Mary M. 1971. *The Festival of Nepal*, Allen & U. (復刻版：Rupa Co, 2005.)
- Levy, Robert I. 1984. *Mesocosm: Hinduism and the Organization of a Traditional Newar City in Nepal*, University of California Press.
- Liechty, Mark. 2001. "Consumer Transgressions: Notes on the History of Restaurants and Prostitution in Kathmandu," *Studies in Nepali History and Society* vol.6 (1), pp.59-101.
- 2003. *Suitably Modern: Making Middle-Class Culture in a New Consumer Society*, Princeton University Press.
- McCoy Owens, Bruce. 2000. "Envisioning Identity: Deity, Person, and Practice in the Kathmandu Valley," *American Ethnologist* vol.27 (3), pp.702-735.
- アッパデュライ・アルジュン、2004。門田健一訳『さまよえる近代 グローバル化の文化研究』、平凡社。（原著：Appadurai, Arjun. 1996. *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press.）
- アルトマン・デニス、2005。河口和也・風間孝・岡島克樹訳『グローバル・セックス』、岩波書店。（原著：Altman, Dennis. 2001. *Global sex*, Chicago University Press.）

（すぎき・つねひこ 研究拠点形成特任研究員）

---

# The Soul-departing Procession in Hinduism and the Cultural Practice of Sexual Minorities

Tsunehiko Sugiki

---

Gai jatra ("Cow procession") is a festival held in Newari communities in Nepal every summer in order to transmit souls of those who died in the past one year to the world of the deity named Yama (i.e. Death), expecting their good rebirths. In these years, Nepal society finds itself in the mighty swell of changing times, the globalization. Gai jatra festival is also under the strong influences of this translocal power. This paper, a case study of Kathmandu Gai jatra festival, is intended as an analysis of the cultural spaces for transmitting the souls and human relations observed in it in the global age.

On the day of this festival when the border between the world of the living and that of the dead becomes unclear, not all but some aspects of the social order in Kathmandu become ambiguous. The space and atmosphere arising in this festival can be regarded as that of world-renouncers, in which the Newari people send the souls of the dead family members, sensing the reality of the inevitable death. However, this is also the space for mass grief-care with cheers and laughs. Priests of the highest caste and the ritual order prescribed by them such as gender-roles and so forth have important roles on making this resigning and caring space.

However, in these years, they have witnessed the decline of this ritual order and the introduction of new ideas on identity and cultural politics of the global age, which has resulted in the restructuring of the space and human relations of this festival intricately with the dynamism of the local and the global, of the multidimensional contentions and agreements. The

procession by the Blue Diamond Society, which is the first private organization built in 2001, aiming at the development of the cross-religious and cross-ethnic association among sexual minorities in Nepal with domestic and transnational networks and the improvement of their social position, is the attempt to transmit the souls of those who died for sexual reasons based on the translocal imagination of the global age and is the claim for attainment of the rights of the sexual minorities in Nepal.